



切磋琢磨を楽しみ、技を磨いた日々が結実

技能五輪・金メダル獲得、世界へ

原子力事業本部 / 神戸造船所 近畿総務統括部

2012年10月、若手技能者が日ごろ鍛えた“腕”を競い合う「第50回技能五輪全国大会」が開催され、三菱重工から30人が参加した。この大会で、三菱重工に47年ぶりとなる金メダルをもたらしたのが、入社3年目の山下大輔だ。並み居る強豪を破るその技能を育んだ背景には、つくる喜び、技能を磨く楽しさを脈々と伝えていく技能伝承の好環境があった。

ものづくりの基盤となる「構造物鉄工」への挑戦

1枚の鋼板から、野書き、切断、曲げ、溶接、組立などを施し、構造物につくり上げる「構造物鉄工」。その技能は、機械設備からビル・橋梁、造船やさらには宇宙産業にまで採用され、ものづくりの基盤となる。

技能五輪全国大会における「構造物鉄工」の競技では、競技時間(10時間)内に図面や仕様書に従って鉄鋼材料を加工し、課題の小型鋼構造物を完成させる。そして完成品の寸法精度や切断面、溶接部の美しさ、

可動部のスムーズさをなどを審査。図面を読みとく、どのような手順でつくるかは、選手が自ら考えて進めることになっておりその方法に正解はない。そのため選手には、各技能に最高水準の能力、そして機器や工具、材料の特性についても深い理解が求められる。

三菱重工・神戸造船所では、入社した技能系社員は社内の教育機関で研修を積み、半年後、その中から技能五輪選手を選抜。選手は日々技能五輪に向けたトレーニングに励む。

2011年の同大会、当時入社2年目の山下

は初出場で銅メダルを獲得した。「当時は無我夢中でトレーニングをしていて、ギリギリの入賞でした。ただあのとき同僚や先輩が



第50回技能五輪全国大会で山下が製作し、金メダルを獲得した課題作品。



第50回技能五輪全国大会の表彰式。金メダルの山下(右)銀メダルの松野(中央)、塩本(左)。



表彰式後、入賞者から世界大会に向けてエールを送られる山下。

すごく喜んでくれたことがうれしくて、その瞬間、厳しいトレーニングをこなしてきて本当によかったと思いました」と山下は振り返る。

また、同種目で同期の松野 譲が銀メダルを獲得。「松野は自分より上にいくと思っていたので、悔しくはなかった。その当時は意識はしていないつもりでしたが、振り返ってみるとライバル意識が芽生えはじめていたんでしょね」。この日から松野に追いつき、追い越すような研鑽の日々が始まった。

競い合う日々でレベルアップし三菱重工が上位独占

山下は当初、溶接などいくつか苦手な技能があったという。だが、そこで支えになったのは隣でトレーニングする松野や先輩の存在。山下が「ほぼ全部、盗んだ」というほど、隣で技を見聞きしながら苦手を克服してきた。

彼らの日々のトレーニングは、入社22年目の西川政裕と17年目の堀家邦俊が指導したが、選手間のライバル心をうまく「技能を磨く楽しさ」へ導いた。堀家は、「ただトレーニングをするだけではつまらないだろうと、常に自ら考えさせる課題を与えて競わせました。山下と松野のライバル争いは、横で見ていて日を追うごとに激しさを増していきました。今日の課題で松野が上をいったら、次の課題では山下が追い抜く。大会前は次々に抜きあっていました。でもそうやってモチベーションを高く保つようにすることが、指導員の仕事だと思っています」という。

また、西川は彼らのトレーニングに励む様子を見て、「こんなに熱い世界があるんだと、自分もだんだんと彼らの指導に熱中していきました」と語る。「競争意識をつける

ために点数をつけて、グラフ化するなどしていました。ただ、上から目線で指導するのではなく、一緒につかっていくという気持ちでいましたね」。その中で、西川が常に言い続けてきたことは、「最初(前工程)がきれいできていたら、後の作業が楽になる」ということだ。これは実際に、製造の現場でも日々教えられていること。山下も、当初苦手としていた溶接などの技能が上達することで、「自分の頭でつくり方を考え、楽しむ余裕を感じられるようになった」という。

こうしてライバルと切磋琢磨し、指導者と一丸となってつくる喜びを感じながら技を磨き、1年後、その努力は実を結んだ。第50回技能五輪全国大会「構造物鉄工」職種で、山下は金メダルを獲得。さらに松野と、1年後輩である塩本悠介も銀メダルを獲得し、三菱重工が上位を独占する結果となった。

次世代への技のリレーが組織を永遠に発展させる

三菱重工と技能五輪との歴史は古く、1962年の技能五輪国際大会にて長崎造船所の本田昭徳が金メダルを獲得。その後も多くの入賞者を輩出してきた。一時、オイルショックや造船不況による技能系社員の採用中止により参加を中断していたが、神戸造船所では、2002年に現場の「若手技能系社員の“ものづくり力”を強化したい」「人材育成に活かしたい」という強い声を受けて参加を再開した。

技能系社員の教育を統括する森本精一は、技能伝承の意義をこう語る。「たとえば、先人が習得するのに10年かかることを、次の世代に伝承すれば彼らはもっと早く習得できます。早く習得した分、上の段階に進むことができます。しかし、一旦途切れるとゼロ

からのスタートになり、取り戻すには大変な時間がかかる。技能伝承は、延々と続けないと廃れてしまう。技能五輪のトレーニングも同じく、山下の金メダル獲得は、これまで先輩たちが習得した知恵や技を受け継ぎ、そのうえでレベルアップに取り組んだ成果だろう。さらに森本はこう続ける「三菱重工には教え手としてのノウハウや、技能の地力を持った人たちが職場に数多くいます。彼らが次世代へ技能を伝承することで、ものづくりの組織は永遠に生き続け、さらに発展していくことができるのです」。

今夏、ドイツ・ライプツヒで開かれる国際大会に、山下は日本代表として出場する。ここでは国内大会とは異なる新たな課題が出されるという。しかしそこでも、受け継がれた“ものづくり力”を発揮するだろう。またそこで得た経験は、技能五輪に挑む後輩の指導へ、また現場でつくられる数々の製品へと着実に活かされていく。



写真左から、原子力事業本部 原子力製造総括部 原子力工作部 大型機器工作課 堀家邦俊 コーチ/プラント機器工作課 山下大輔/プラント機器工作課 西川政裕 コーチ/神戸造船所 近畿総務統括部 勤労課 森本精一 主席